

## ■ 今後もさまざまな形での地域・社会貢献を ■



大谷 貴美子

Kimiko Otani

京都府立大学大学院  
生命環境科学研究科教授

このたびは大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所の設立25周年おめでとうございます。私と大阪ガスおよびCELとのつながりといいますと、日本調理科学会の活動を通じてが、その最初ではなかったかと思えます。昨年度まで、私は近畿支部の支部長をさせていただいていましたが、その活動におきましては、本当にいろいろな形でご協力をいただきました。この場をお借りして支部の方々を代表して改めてお礼を申し上げます。

私個人としましては、現在、大学においても食育活動に力を注いでいるという関係もございまして、大阪ガスが数年前につくられた、児童向けの『食育ブック』には監修代表として関わらせていただきました。本当に、良いものができるかと私自身も喜んでおりますが、お聞きしますと、この本も累計で既に10万部を超えて活用していただいているとのこと、大阪ガスおよびCELの社会的な貢献の大きさを改めて感ずるところです。

これからもさまざまな形で、地域貢献、社会貢献をなされていくと思いますが、すばらしい活動を通じて私たちの生活が、より良いものになるようにさらに頑張ってくださいますよう、改めてお願い申し上げます。

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 設立25周年に当たって

# CELへの期待

Message

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)の設立25周年シンポジウム—CELからのメッセージ—「“人”と“つながり”から持続可能な社会を実現する」の開催に合わせて、これまでCELの活動へのご協力や季刊誌「CEL」へのご寄稿等で日頃からお世話になっている方々のうち5人の先生から、CELへの今後の期待を含めてのビデオメッセージをいただき、開催当日の会場にて披露させていただきました。今回「CEL」誌上にて、それぞれの方のお話の概要を改めて紹介いたします。

## ■ エネルギーと文化について一層深い研究を ■



高田 光雄

Mitsuo Takada

京都大学大学院  
工学研究科教授

CELの設立25周年おめでとうございます。研究所発足当初、1980年代半ば頃に、私はCELの研究をどういう方向に進められようかとされているのか、所長にお尋ねしたことがありました。その際、エネルギー会社としての本体では、なかなかできないような研究をしようとしているとうかがい、大きな期待を持って受けとめたことを覚えています。

当時は、どちらかという周囲領域の研究をしていくのだというお話だったと思うのですが、それから25年、今や社会の方が、CELの研究の方に向かってどんどん動いてきて、CELでやられている研究は、今や社会のメインストリームになってきたように思います。

CELの研究は、エネルギー・文化研究所という名前のとおり、エネルギーと文化との関係に最大の関心を寄せていると思います。私は、以前から、エネルギー問題の解決だけを短絡的に進めることが文化の破壊につながるのではないかと大変危惧しています。同時に、エネルギー問題の解決が新たな文化の創造につながる可能性があるとも考えています。これから、CELにおいては、そういった問題も含めて、エネルギーと文化の関係について、より一層深い研究をしていただければと思います。

## ■ 地域に密着した活動の幅をさらに広げて ■



茶谷幸治  
Koji Chatani

フリー・プロデューサー、  
大阪大学招聘教授

私とCELとの関係といいますと、以前に私が長崎の「さるく博」というまち歩き博覧会をプロデュースしている頃に、その活動に関心を持っていただき、「CEL」誌に寄稿をさせていただいたことがあります。それ以来、観光コミュニティリズム、地域のまちづくりなどに関しまして、相互に意見を交換させていただいております。

研究員の栗本智代さんが「なにわの語りべ」という活動を積極的に展開されていて、これも大阪で本来、市民が味わうべきものを、楽しく語り、伝えていくということで、研究所という枠を越えているのですが、なんともすばらしい活動だと思います。ここで示されているように、CELの研究は地域とうまく密着しています。

「CEL」誌を拝見しましたが、生活者の視点で、住まいのこと、食べ物のこと、子どものことなどを真正面からしっかり捉えている。これはなかなかない雑誌で、私の仕事でも非常に役に立っています。こういうことを地域のエネルギーの会社が支えておられることに敬意を表します。研究所の活動が、地域のためにもっと大きく幅を広げていただきたいと思えますし、皆さんにもそれをサポートしていただきたいと思えます。

## ■ 新しい「エネルギー・文化」創造の先導役に ■



植田和弘  
Kazuhiro Ueta

京都大学大学院  
経済学研究科教授

このたびは大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所の設立25周年、大変おめでとうございます。研究所が出されている「CEL」という雑誌をいつも楽しく拝見しています。人、コミュニティ、そしてつながりを大切に作る編集については、常に大いに敬意を払っている次第です。

エネルギーは一見、モノのようではありませんけれども、そのモノが生かされるためには、人とコミュニティ、つながりというものが、たいへん大事であるということです。そのような趣旨で、「CEL」誌の編集の方針はこれまでずっと一貫してきており、それは非常にすばらしいことであると私は思っております。

3月11日の東日本大震災、そして原発の事故を受けて、今後、エネルギー、環境問題も、先がたいへん見えにくくなっている状況にあります。けれども、こういう時だからこそ、新しい「エネルギー・文化」を創り出すことが世の中から求められているのではないのでしょうか。これまでの編集方針を生かしながら、この新しい「エネルギー・文化」の創造に向けて、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所には、ぜひともその先導役になって進んで行っていただきたいと思えます。

## ■ 防災・減災を含め、今後の活動の発展に期待 ■



矢守克也  
Katsuya Yamori

京都大学防災研究所教授  
巨大災害研究センター長

CELとはいろいろなご縁があります。私も数年前に「CEL」誌に寄稿させていただきました。20年以上前、地理学を専攻しておりました父が、生前に原稿を掲載させていただいたことがあり、親子二代でお世話になっているというのが、私にとって一番印象深いことです。

もうひとつは、上町台地のいくつかの場所で、減災・防災をテーマにして、ワークショップの手伝いをさせていただいたことがあります。

昨今、千年に一度といわれる大災害が起ころしましたが、防災・減災の取り組みは、減多に起きないことを相手にするものです。その分、日頃の生活文化、地域の文化という日常的なところに、防災・減災の取り組みをどう位置づけていくのかということが大変重要になります。その点で生活者文化、エネルギー、そして環境、地域などをテーマとして25年間、活動を続けてこられたCELの皆様には大いに敬意を表したいと思います。

防災・減災のことを考えている一研究者として、またボランティア団体に所属する者としても、今後このCELの活動がますます発展されることを期待したいと思いますし、微力ながらもお手伝いができればと考えています。